

古今和歌集四季の部の詞書に見られる固 有名詞について

－ 古今和歌集の詞書の性格の一端 －

水谷 隆*

(e-mail : midutani@yahoo.co.jp)

<目次>

- | | |
|--------------------------------|-------------------------|
| 1. 古今和歌集の詞書のありようについて | 3. 1. 歌意の理解に必須のもの |
| 2. 古今和歌集四季部の歌で、詞書中に固有名詞を含む例の一覧 | 3. 2. 歌意の理解に必要とは思われないもの |
| 3. 古今和歌集四季部の詞書中の固有名詞の分類 | 4. 上記現象に対する解釈 |
| | 5. 今後の研究の展望 |

キーワード：古今和歌集（Kokin Wakasyu）、四季の歌（Waka in the four seasons）、詞書（kotobagaki）、固有名詞（Proper noun）、歌枕（Utamakura）

1. 古今和歌集の詞書のありようについて

古今和歌集の詞書は、個々の歌が収められていた原資料に記されていたものを、そのまま転載したものではない。それはたとえば、作歌の事情がわからないとは考えがたい撰者自身の作歌が、恋部に「題知らず」として相当数収められていることや、もと紀貫之の個人歌集の詞書に「あるじうせたる家に桜の花をみて詠める」（貫之集770）と記された「色も香も昔の濃さににはへども植ゑけむ人の影ぞ恋ひしき」という歌を、古今集に撰ぶ際に、撰者として貫之自身も参加していた中で、歌本文の「香」という言葉にふさわしく「あるじみまかりにける人の

* 武庫川女子大学非常勤講師，日本古典文学

家の梅花を見て詠める」と改めたと考えられる例などのあることから明らかである。

そもそも、古今和歌集は勅撰和歌集として初めてのものであり、撰者たちはその編纂にあたって、選歌の方針だけではなく、歌集としての体裁もあらたに作り出さなければならなかった。詞書についても以前の歌集には見られない新たな形式でもって全巻を統一した。その際、撰集の原資料となったものに記された、それぞれの歌に関する情報のうちから必要なものを取捨選択、また時には改変を施し、古今和歌集の詞書としてふさわしいものに仕立てたのである。このことはすなわち、古今和歌集の詞書に記されている情報は、原則としてその歌の、古今和歌集の歌としての鑑賞に際して必要かつ十分なものである、ということの意味するだろう。

さらに、歌本文の内容だけでは春の歌と受け取ることが妥当と思われる¹⁾「山高み雲居に見ゆる桜花心の行きて折らぬ日ぞなき」という歌が、「内侍のかみの右大将藤原朝臣の四十賀しける時に、四季の絵かける後の屏風にかきたりける歌」という詞書と共に提示される形で、賀の部（358）に収められていることなどからすれば、古今和歌集において詞書とは、歌の解釈の手助けとなる、補助的な情報を提示するのに留まるものではなく、歌と詞書と²⁾があわさって、一つの鑑賞の対象となっているものと考えられるだろう³⁾。

そのような前提で見たとき、古今和歌集の詞書に記された固有名詞には、歌意の理解に必要不可欠なものと、歌意そのものの理解のためには必ずしもなくてもよいと思われるものとの2種があることに気づく。たとえば前者は、

雁の声を聞きて越へまかりにける人を思ひてよめる 凡河内躬恒
春くれば雁帰るなり白雲のみちゆきぶりにことやつてまし（春上30）

1) 実際、同歌が、古今和歌集の撰者でもある紀貫之が編纂した新撰和歌では、詞書を削除された上で春部の歌として同集に収められている。

2) 厳密に言えば、その歌の配列も含む。

3) このことの詳細は、「新撰和歌が詞書きを持たぬことについて」（大阪女子短期大学紀要第39号2015）に述べた。

などである。この歌では、詞書に「越」の国へ行った人を思って詠んだ、という情報があることで、帰雁の「みちゆきぶり」、すなわち、旅の途中でメッセージを渡して欲しいという趣旨が得心できる⁴⁾。

一方、後者は、たとえば、

寛平御時きさいの宮のうたあはせのうた
源まさずみ
谷風にとくるこほりのひまごとにうちいづる浪や春のはつ花（春上12）

などで、この歌の場合、どの折の歌合に出詠されたものなのか、という情報が一首の意味を理解するのに必要とは考えられない。

実は、古今和歌集の詞書に含まれる固有名詞を、この観点で分類したとき、とりわけ巻1～6の四季部において、ある顕著な傾向が見て取れるように思われる。本稿では、そのことを説明するために、四季部の歌で詞書中に固有名詞を含むものを一覧し、その上で傾向の確認、そして、そのことの意味を考察したい。

2. 古今和歌集四季部の歌で、詞書中に固有名詞を含む

例の一覧

以下に四部季の歌で固有名詞を詞書中に含むものを一覧する。なお、上に記した春上巻12番の歌のような、その歌が出詠されて歌合の名称が詞書に含まれる例が以下のように認められるが、いずれも歌意の理解に必須のものとは考えられない⁵⁾ので、一々の提示は省略する。

- 4) 窪田空穂『古今和歌集評釈』（東京堂 1935）が「この歌でもっとも注意される点は、この歌は詞書を離しては、意味が十分に解せない事である。すなわち歌は独立ができず、散文の力を借りて辛くもその任を果たしているのである」と評するとおりである。
- 5) 「歌意の理解に必須のものとは考えられない」とは、ある歌が、歌合に出詠されたものであるか否かによって、その文意に差異は生じないという意味で述べたものである。無論、場合によっては、当該の歌合に出席していた者が、現場での記憶を前提としてその歌を鑑賞

「寛平御時后宮歌合」 (12~15/24/46~47/60/92/101~103/116/118/131/153~154/178/212/243~244/264/271/301/326~328/340)

「亭子院歌合」 (68/89/134)

「仁和中将御息所家歌合」 (108/114)

「是貞親王歌合」 (189/193~194/197/207/214~215/218/225/249~250/257~258/263/266/270/278/295~296/306)

二条の后の東宮の御息所と聞えける時、正月三日お前に召して仰ごとあるあひだに、日は照りながら雪の頭にふりかかりけるをよませ給ひける 文屋康秀
春の日の光にあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき (春上8)

この歌が、東宮の母御息所のお前で披露されたものだという情報があることで、初、2句の「春の日の光」が、東宮、すなわち宮の恩恵を象徴したものであるとわかる。ただし、その東宮の母が、後に二条后と呼ばれることになる女性であることが、歌意の理解に影響を与えるとは考えにくい。

西大寺のほとりの柳をよめる 僧正遍昭
あさみどりいとよりかけてしらつゆをたまにもぬける春の柳か (春上27)

現在まで、この歌の詞書になぜ「西大寺(西寺)」と記されているのかについての定説はない。ただ、雨野氏の説⁶⁾によれば、この時期の西大寺は堂舎を拡大させ、組織も充実を続ける時期にあり、「春のものとして新たに意識された白露が光る、柳の春の美しさを歌う歌に、詞書では西寺という、今まさに伸びゆく盛りの寺が背景として重ね合わせられる。つまり発展期の西寺は、この歌で感嘆の対象となる柳の、若々しく、みずみずしく、また伸びやかな「春の美」への感動

することで、その歌意の理解に影響を与えることもありうる。しかし、たとえば、「寛平御時后宮歌合」に、古今和歌集の下命者である醍醐天皇は関わっておらず、醍醐天皇にとって、そのような鑑賞があったとは考えにくい。

6) 雨野弥生「『古今和歌集』二十七番歌詞書の地名をめぐって」(同志社女子大学大学院文学研究科紀要15号(2015))

を表現するための景として、ふさわしかったのである。」とも考えられる。こうした実景を想起させるものとして、詞書の「西大寺」という固有名詞が機能している可能性は十分に認められる。

雁の声を聞きて越へまかりにける人を思ひてよめる 凡河内躬恒
春くれば雁帰るなり白雲のみちゆきぶりにことやつてまし（春上30）

この詞書中の「越」という固有名詞が歌意の理解に必須のものであることは、前章に述べたとおりである。

くらぶ山にてよめる 貫之
梅花にほふ春べはくらぶ山闇にこゆれどしるくぞ有りける（春上39）

この歌では、固有名詞「くらぶ山」の「暗」があるからこそ「闇」に越える、ということが意味をなす。ただ、この山の名称は、歌の中に含まれているので、詞書による提示は、歌意理解のためには必要とは言えないだろう。

初瀬に詣づるごとに宿りける人の家に久しく宿らで、程へて後にいたれりければ、かの家のあるじかくさだかになむ宿りはあるといひいだして侍りければ、そこに立てりける梅の花を折りてよめる 貫之
人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔のかににほひける（春上42）

この歌では、詞書で「人の家」が、「初瀬」への途上、すなわち、ふるさと奈良にあることが示されている⁷⁾。そのことで歌中の「ふるさと」の「花」が、知人の宿の花というだけではなく、奈良の花であることが理解されることになる。「ふるさととなりにしならのみやこにも色はかはらず花はさきけり」（古今和歌

7) 「はつせにまうづる道にならの京にやどれりける時よめる」（古今集986番歌詞書）、
「山とにむかしおやありける人のおやなくなりて、はつせにまゐるとて 人ゆくことこそ
うけれふるさとのむかしならひてみし人もなく（伊勢集132）」などの存在がこの理解を裏付ける。

集 春下 90) という奈良の帝の歌を思い合わせるならば、心変わりした「人」とはことなり「昔の香」に匂っている「花」は、さすが、ふるさと奈良の花だけあって、という意味をも有することになるだろう⁸⁾。すなわち「初瀬」という固有名詞は歌意の把握に重要な役割を果たしていると言えよう。

染殿の后のおまへに花がめに桜の花をささせ給へるを見てよめる 前太政大臣
年ふればよはひはおいぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし (春上52)

この歌の場合、「単なる「桜」ではなく、「皇太夫人になって次の天皇になることを保証された惟仁親王の母である娘の染殿の後の前にある桜」と限定することによって、この歌の理解・鑑賞は全く異なってくる⁹⁾とされる通りである。

渚の院にて桜を見てよめる 在原業平朝臣
世中にたえてさくらのなかりせば春の心はのどけからまし (春上53)

詞書で「渚の院」と場所を示すことで、都からわざわざ渚の院まで遠出して桜を見たということがわかり、それによって、桜のために「春の心」はのどかでない、という歌意がいつそう生きてくる。つまり、一首の歌意の理解に「渚の院」という地名は欠かせないものと考えられる。

僧正遍昭によみておくりける 惟喬親王
桜花散らば散らなむ散らずとてふるさと人のきても見なくに (春下74)

「「ふるさと人」と呼ばれた遍昭が、かつてこの場所に住んでいたというのでなければ、この歌は成り立たない¹⁰⁾というとおりで、この歌の場合、「僧正遍昭」という固有名詞が解釈に必須である。

⁸⁾ この歌で「人」と対比されているのは、「花」ではなく「ふるさとである」という説は、竹岡正夫『古今和歌集全評釈』（右文書院 1976）が提案している。

⁹⁾ 片桐洋一『古今和歌集全評釈』（講談社 1988）

¹⁰⁾ 注8に同じ。

東宮雅院にて桜の花のみかは水に散りて流れけるを見てよめる 菅野高世
枝よりもあだに散りにし花なれば落ちても水のあわとこそなれ（春下81）

「東宮」は醍醐の息子である保明親王のこと。ただ、この親王の邸で詠まれた歌だ、という情報の有無が、歌意の理解に影響を与えるとは思われない。¹¹⁾

春宮の帯刀の陣にて桜の花の散るをよめる 藤原好風
春風は花のあたりをよきてふけ心づからやうつろふと見む（春下85）

桜の落花を促す春風に対して、桜は自ら散ろうとして散るのだと思いたいから、どうか吹かないで欲しい、と願うこの歌の趣向は、何処の桜を詠んだものであったとしても変化しない。すなわち、「東宮の帯刀の陣」という固有名詞は歌意の理解に必須ではない。

比叡にのぼりて帰りまうできてよめる 貫之
山たかみみつわがこしさくら花風は心にまかすべらなり（春下87）

詞書の「比叡に登る」は、単に、登山するという意味ではなく、「にはかにいへの人にもしらせでひえにのぼりてかしらおろしはべりておもひはべりしも」（遍昭集11）や、「ゆきふりかかりしに、ひえにのぼりて侍りしに、むかへなる房にうたよむちごありとききていひつかはしし」（重家集517）などに明らかのように、延暦寺に行くことを意味する。つまり、詞書中の「比叡」という地名があることによって、比叡山の中腹にある延暦寺から、さらに高い山の桜を見た、という歌の意味が明らかになる。

雲林院親王のもとに、花見に北山のほりにまかれりける時によめる 素性
いざけふは春の山辺にまじりなむくれなばなげの花のかげかは（春下95）

11) なお、「この歌を入れるに種々の心あり。まつ風流のすぐれたる歌なればなり。又、崩御の後になげきの切なるとき、此歌を思ふに、散るもはかなき花の落ちても泡とのみなるを、あはれと思ふよしにや」（両度聞書）という説があるが、この歌が、哀傷部ではなく、四季の部に収められていることを思えば、無理のある説と言えよう。

一首は、山辺の桜を心ゆくまで、そこに泊まって味わいましょう、と誘いかけるものである。この趣旨を読み取るために「雲林院親王（仁明第七皇子常康親王）」という情報は必須とは考えられない。一方、「北山」は、

北山に紅葉をらむとてまかれりける時によめる つらゆき
見る人もなくてちりぬるおく山の紅葉はよるのにしきなりけり
(古今和歌集 秋下297)

北山に僧正へんぜうとたけがりにまかれりけるによめる そせい法し
もみぢばは袖にこきいれてもていでなむ秋は限と見む人のため
(古今和歌集 秋下309)

などに見られるように、都人たちが、四季の植物を愛でるために出かける場所というイメージがあった。そうした、いわば郊外散策として親しまれた所に、私たちも出かけましょう、という趣旨が、この地名のあることによって、一首に付加される。

しがの山ごえに女の多くあへりけるによみてつかはしける 貫之
あづさゆみはるの山辺をこえくれば道もさりあへず花ぞちりける (春下115)

この歌の第四句の「花」は、詞書の「女の多くあへりける」から、美しい女たちを比喻したものであると解釈されることになる。そして、この「女」たちと会ったのが、「志賀の山越え」だったことから、彼女たちは志賀寺（崇福寺）参詣の途中であったことがわかる。志賀寺参詣とは、顕昭『古今集註』が藤原教長の言として伝えるように、「昔の人は花のさかり、もみぢのおり、友だちうちむれて、かの山をこえて、花をも見、紅葉を折けり。是をいみじきあそびとなんしける。」というようなものであったとおぼしい。つまり、詞書の「志賀の山越え」という地名は、ここで会った女たちが美しく着飾って、まさに花と喩えるのにふさわしい様子であったことを示している。

志賀より帰りけるをうなどもの花山に入りて藤の花のもとに立ち寄りて

帰りけるに、よみておくりける

僧正遍昭

よそに見てかへらむ人にふぢの花はひまつはれよえだはをるとも（春下119）
この歌の詞書の「志賀より帰りけるをうなども」は、上の「あづさゆみ」の歌の場合と同様、行楽を兼ねた志賀寺参詣の帰途にある、華やかな女たちであることを指示するという機能を有している。また、この女性たちにとっては、帰途に立ち寄った「花山」、すなわち遍昭の住居である山科の元慶寺が、志賀寺からの帰途の通過地点であることも示されることになる。そのことで、歌本文の「他所に見」る、すなわち、横目で眺める、という表現が活きる。すなわち、「志賀」も「花山」も一首の歌意の理解に不可欠な地名であると考えられる。

吉野河のほとりに山ぶきのさけりけるをよめる

貫之

吉野河岸の山吹ふくかぜにそこの影さへうつろひにけり（春下124）

「吉野川」は、「吉野河いは浪たかく行く水のはやくぞ人を思ひそめてし」（古今和歌集 恋一 471）に見られるように急流というイメージが定着していた。その水面に映る影だからこそ、「移ろふ」＝散っているように見える、という一首の趣向が成り立つ。この歌は、かように、「吉野川」の歌でなくては成り立たない。けれども、この地名は歌の中に詠み込まれているので、詞書でわざわざ示さなくても歌意の理解に差し支えはないものと思われる。

音羽山をこえける時に郭公の鳴くを聞いてよめる

紀友則

音羽山けさこえくれば郭公こずゑはるかに今ぞなくなる（夏142）

この歌は、「音羽山」の「音」と、ほととぎすの「声」が結びつく面白さを主眼にした趣向で詠まれている。この地名は不可欠であるが、上の「吉野河」の歌と同様、詞書にこの名詞がある必要は、歌意の理解に不要と思われる。

さぶらひにてをのこどもの酒たうべけるに、召して郭公待つ歌詠めとあり

ければよめる

躬恒

ほととぎすこゑもきこえず山びこはほかになくねをこたへやはせぬ（夏 161）

「侍」は清涼殿の殿上の間を示す。しかし、をのこたちの酒宴の場所が清涼殿であるか否かに関わらず、ほととぎすの初音を待つ歌の意味は、変化するとは思われない。

秋立つ日、上のをのこどもかもの河原に川逍遙しける供にまかりてよめる

貫之

河風のすずしくもあるかうちよする浪とともにや秋は立つらむ（秋上 170）

宮中に勤める「上の男ども」が、宮中からほど近い「賀茂の河原」に「川逍遙」した、と詞書に示すことで、一首に描かれているのが何気ない日常の風景であることを示している。この歌では、そのことで、川風の涼しさに気づいた、という気持ちの新鮮さを表すことになると考えられる。

雷の壺に人々集まりて秋の夜をしむ歌よみけるついでによめる 躬恒

かくばかり惜しと思ふ夜をいたづらにねてあかすらむ人さへぞうき（秋上 190）

一首の主題は「秋の夜惜しむ」ということであり、この歌が詠まれた場が雷壺（襲芳舎）であるかどうかは歌意の把握に必須ではない。

僧正遍昭がもとに奈良へまかりける時に、男山にて女郎花を見てよめる

布留今道

をみなへしうしと見つつぞゆきすぐるをとこ山にしたてりと思へば（秋上 227）

この歌は、古今和歌集で直前に置かれた、

題しらず 僧正へんぜう

名にめでてをれるばかりぞをみなへし我おちにきと人にかたるな

（古今集 秋上 226）

を踏まえて読み取る必要がある。そのことを示すために、この歌の詞書に「遍昭」

「奈良」「男山」という地名を記したものと考えられよう。

朱雀院の女郎花あはせによみてたてまつりける 左大臣
をみなへし秋のの風のうちなびき心ひとつをたれによすらむ (秋上230)

この歌が、現場での詠ではなく、女郎花合わせに出詠されたものである、という情報は、一首の理解に役立つのかもしれないが、その催しの主催者が朱雀院であるのか否かは、歌意に関係があるとは思われない。その点、歌合に出詠された歌と同様である。

寛平御時、蔵人所ののをのこども嗟峨野に花見むとてまかりたりける時、
帰るとてみな歌よみけるついでによめる 平貞文
花にあかでなにかへるらむをみなへしおほかるのべにねなましものを
(秋上238)

「嗟峨野」は、上に示した「名にめでて」の歌を始め、

さがの野に前栽ほりにまかりて 藤原長能
ひぐらしに見れどもあかづをみなへしのべにやこよひ旅ねしなまし (拾遺抄107)
さがのにすみ侍りけるころ、房の前栽を見に女どものまうできたりければ
よみはべりける 遍昭
ここにしもなににほふらんをみなへし人のものいひさがにくきよに (拾遺抄411)
さが野に前栽ほるとて
ももしきにうつしうともをみなへしわがたづねこしこころわするな (元真集133)

などの例があることから、女郎花の美しい野として知られていたことが推測される。であるならば、「嗟峨野に花見む」と詞書に示すことが、歌の「女郎花多かる野」の種明かしになっていると考えられる。ただ、この歌が詠まれたのが、「寛平御時」に「蔵人所」の官人たちが花見をしたときである、という情報は一首の歌意に関わらないだろう。

仁和の帝みこにおはしましける時、布留の滝御覽ぜむとておはしましける道に
遍昭が母の家に宿りたまへりける時に、庭を秋の野に造りて御物語のついでに
詠みてたてまつりける 僧正遍昭

さとはあれて人はふりにしやどなれや庭もまがきも秋ののらなる（秋上248）

詞書に記された、仁和帝が遍昭の母の家に宿った、という情報は、遍昭の詠んだこの一首が天皇に対する謙辞であることを明らかにすることになる。また、遍昭母の家に宿ったのが「布留の滝」見物への道中だったことで、第二句の「ふりにし」が意味をなす。¹²⁾

貞観御時、綾綺殿の前に梅の木ありけり、西の方にさせりける枝の
紅葉始めたりけるを上に侍ふをのこどものよみけるついでによめる 藤原勝臣
おなじえをわきてこのはうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ（秋下255）

西の方に伸びた枝だけが色づいている梅の木を見て、なるほど、西が秋のやってくる方角だったのですね、と歌う趣向は、この梅の木が綾綺殿のものであるかどうかで変化しない。また、この歌の詠まれたのが、貞観御時だという情報も同様に、歌意自体の理解には関わらない。

石山にまうでける時、音羽山のもみぢを見てよめる 貫之
秋風のふきにし日よりおとは山峰のこずゑも色づきにけり（秋下256）

詞書に「石山にまうでける時」と示すことで、一首が、石山寺から見て、秋の訪れてくる方角である西にある音羽山を遠景として詠んだものであることがわかる。ゆえに、この歌で描かれている色づいた「梢」とは、木の下から見上げたものではなく、遠く眺める山のさらに先端がわずかに色づいている景色であることがわかる。

守山のほとりにてよめる 貫之
しらつゆも時雨もいたくもる山はしたばのこらず色づきにけり（秋下260）

12) 「いそのかみふるき宮この郭公声ばかりこそむかしなりけれ」（古今和歌集144）のように、地名の「布留」は、「古」の掛詞として用いられることがしばしばある。

この歌は、「守山」であるからこそ、時雨が「漏る」という面白さが際立つ。けれども、この地名は歌の中に示されてることから、詞書で別に示さずとも、一首の趣向は十全に受け取られる。

大和国にまかりける時、佐保山に霧の立てりけるを見てよめる 紀友則
たがための錦なればか秋ぎりのさほの山辺をたちかくすらむ（秋下265）

この歌も、歌中に「佐保山」が詠み込まれているので、詞書の「大和国」「佐保山」が無くても、歌意の理解は十分に可能である。

寛平御時きくの花をよませたまうける 敏行朝臣
久方の雲のうへにて見る菊はあまつほしとぞあやまたれける（秋下269）

この歌も、詠まれたのが「寛平御時」であるということが、意味をもたらすとは考えがたい。

同じ御時せられける菊合に、州浜を作りて菊の花植ゑたりけるに
加へたりける歌、吹上の浜のかたに菊植ゑたりけるによめる 菅原朝臣
秋風の吹きあげにたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか（秋下272）

この歌の場合、詞書で「吹上の浜」をかたどった州浜を詠んだものだ、という情報が示されなければ、一首で用いられた掛詞の理解が困難となる。一方、「同じ御時」（＝寛平御時）という情報は、歌意の把握に必須とは考えられない。

大沢の池のかたに菊うゑたるをよめる
ひとつもとと思ひし菊をおほさはの池のそこにもたれかうゑむ（秋下275）

この歌が、実景ではなく、大沢池の模型である州浜を描いたものであるという、一首の理解に大きく関わる情報として、詞書中の「大沢池」という地名は機能している。

仁和寺に菊の花召しける時に歌そへて奉れとおほせられければ、よみてたてまつりける 平貞文
秋をおきて時こそ有りけれ菊の花うつろふからに色のまされば（秋下279）

詞書の「仁和寺」は宇多法王を示す。この情報が記されることで、一首に籠められた、法王に菊の花を献上できるのも、法王の恩寵であるという趣旨が明確になる。

二条の後の春宮の御息所と申しける時に、御屏風に竜田河に紅葉流れたるかたを
かけりけるを題にてよめる 素性
もみちばのながれてとまるみなとには紅深き浪や立つらむ（秋下293）

この歌が、詞書に示されるように、二条後の屏風であるということがわからなくても歌の理解に支障は生じない。なお、「みなとは大海の通路にて、浦々の舟の寄る所也。後の所に世界の人の心を寄せ奉るをよそへいふ也」（両度聞書）という説もあるが、中世的な牽強附会の説であろう。

北山に紅葉折らむとてまかれりける時によめる 貫之
見る人もなくて散りぬるおく山の紅葉はよるの錦なりけり（秋下297）

「北山」は、先に述べたように、都人たちが泊まりがけ、花や紅葉狩りに出かける場所であつたらしい。そのような、遠出の行楽であることを「北山」という地名を詞書に明示することで、都人が目にしていない、「夜の錦」という歌の発想が生きることになる。

小野といふ所にすみ侍りける時紅葉を見てよめる 貫之
秋の山紅葉をぬさとたむくればすむ我さへぞたび心ちする（秋下299）

「小野」という郊外¹³⁾に住んでいるという情報を前提にして、「秋の山」という舞台設定と「旅」ではないのに「旅心地」がするということが納得できる。

神奈備の山を過ぎて竜田河を渡りける時に、紅葉の流れけるをよめる
清原深養父
神なびの山をすぎ行く秋なればたつた河にぞぬさはたむくる（秋下300）

¹³⁾例えば、古今和歌集970の詞書に、出家した惟喬親王が住んでいる「小野」は、比叡山の麓にある雪深い里であると記されている。

この詞書中の「神奈備の山」も「竜田川」も歌の中に現れており、詞書で記されなくても歌意の把握は可能である。

竜田河のほりにてよめる
坂上是則
紅葉ばの流れざりせば竜田河水の秋をばたれかしらまし（秋下302）

これも上の歌と同様である。

志賀の山ごえにてよめる
春道列樹
山河に風のかけたるしがらみは流れもあへぬ紅葉なりけり（秋下303）

「志賀の山越」は、前述のように、多くの都人が往来する名所であった。そのため、この地名を示すことで、「山川」の様子が具体的に思い浮かべられることになる。

亭子院の御屏風のゑに、河渡らむとする人の紅葉の散る木のもとに
馬をひかへて立てるを詠ませたまひければ、つかうまつりける（躬恒）
立ちとまり見てをわたらむもみぢばは雨とふるとも水はまさらじ（秋下305）

屏風の主が「亭子院」であるか否かが歌の解釈に影響するとは考えにくい。

北山に僧正遍昭とたけがりにまかれりけるによめる 素性法師
もみぢばは袖にこきいれてもていでなむ秋は限と見む人のため（秋下309）

「見る人も」（297）の歌の折に記したように、泊まりがけで出かける場所である「北山」という地名を示すことで、「もみぢ葉」がわざわざ持ち帰るいえづとであることが得心できる。一方で、「遍昭」と一緒に行った、という情報が、一首の理解に必要なだとは考えにくい。

寛平御時古き歌たてまつれと仰せられければ、竜田河紅葉ば流るといふ歌をかきて、その同じ心をよめりける 興風

み山よりおちくる水の色見てぞ秋は限と思ひしりぬる（秋下310）

歌を奉れと言った人物が、寛平御時の醍醐天皇であるかどうかは、歌意の理解そのものには影響を与えるとは考えにくい。

秋のはつる心を竜田河に思ひやりてよめる 貫之

年ごとにもみちばながす竜田河みなどや秋のとまりなるらむ（秋下311）

これも、歌の中に示された同じ地名が詞書中に現れているものである。

しがの山ごえにてよめる 紀秋峰

白雪のところもわかずふりしけばいはほにもさく花とこそ見れ（冬324）

「山河に」（303）と同じく、歌に描かれた情景を具体的に想起させるための機能を、この地名が担っていると考えられる。

大和国にまかれりける時に、雪の降りけるを見てよめる 坂上是則

あさぼらけありあけの月と見るまでに吉野の里にふれるしらゆき（冬332）

歌の中に「吉野の里」とあることから、大和国の歌であることが詞書になくても歌の趣旨は理解できる。

3. 古今和歌集四季部の詞書中の固有名詞の分類

以上に網羅した、古今和歌集四季部の歌に添えられた詞書中の固有名詞を、始めに想定したように、歌意の理解に必要な不可欠なもの、歌意そのものの理解のためには必ずしもなくてもよいと思われるものとの2種に分けて整理したい。

3. 1. 歌意の理解に必須のもの

次に示す固有名詞は、歌意の理解に必須のものと思われる。

「西大寺」(27) /¹⁴⁾「越」(30) / 「初瀬」(43) / 「染殿の後」
(52) / 「渚の院」(53) / 「僧正遍昭」(74・227) / 「比叡」
(87) / 「北山」(95・297・309) / 「志賀の山ごえ」(115・
303・324) / 「志賀」(119) / 「花山」(119) / 「賀茂の河原」
(170) / 「奈良」(227) / 「男山」(227) / 「嵯峨野」(238) /
「仁和の帝」(248) / 「布留の滝」(248) / 「遍昭が母」(248) /
「石山」(256) / 「音羽山」(256) / 「吹上の浜」(272) / 「大
沢の池」(275) / 「仁和寺(宇多法王)」(279) / 「小野」(299)

3. 2. 歌意の理解に必要とは思われないもの

これは、歌意の理解に関わる固有名詞ではあるけれども、歌の中に既に示されておき、詞書中の名詞と重複するものと、歌意そのものの理解にまずは関わらないと考えられるものとに分けて考えられるように思われる。まず、前者と目されるものは、次の通りである。

「くらぶ山」(39) / 「吉野河」(124) / 「音羽山」(142) /
「守山」(260) / 「大和国」(265) / 「佐保山」(265) / 「神
奈備山」(300) / 「竜田河」(300・302・311)

これらを一見して気づくのは、いずれも歌枕であることである。歌枕の場合、実景として詠まれる他に、屏風の絵として、あるいは題詠的な歌の題材として詠まれることも多い。今改めて上に示した地名の含まれる詞書を一覧すれば、

○くらぶ山にてよめる(39)

¹⁴⁾ この「西の大寺」に関しては、具体的な風景をイメージさせるのに必要と考えた。ただ、の時期、この寺には僧綱も置かれ、官寺として帝の権威と直結する存在であった。後述のように、天皇に関わる事物を示す固有名詞は、歌意の理解に関わらなくても詞書中に示すと考えられるが、その例に相当すると判断することも可能であろう。

○よしの河のほとりに山ぶきのさけりけるをよめる（124）

○おとは山をこえける時に郭公のなくをききてよめる（142）

○もる山のほとりにてよめる（260）

○やまとのくににまかりける時、さほ山にきりのたてりけるを見てよめる（265）

○神なびの山をすぎて竜田河をわたりける時に、もみぢのながれけるをよめる（300）

○たつた河のほとりにてよめる（302）

と、現場で実際の風景を見て詠んだことを明示するものと、

○秋のはつる心をたつた河に思ひやりてよめる（311）

と、題詠的な歌であることを示したものとがある。つまり、歌枕を詠んだ歌の場合、それがどんな状況で詠まれたものであるのか、すなわち、題詠的な歌なのか、実景を見ての感慨を詠んだものなのか、歌の理解・鑑賞に関わると考えられていただろう事を、これは示すのだろう。同様に、

やまとのくににまかれりける時に、ゆきのふりけるを見てよめる 坂上これのり
あさぼらけありあけの月と見るまでによしののさとにふれるしらゆき（冬332）

の「大和国」も、歌中の歌枕「吉野の里」が実景であることを示すためのものであったと考えられよう。

次に、歌意そのものの理解にまずは関わらないと考えられる固有名詞を一覧する。

「二条の後」（8・293）／「寛平御時后宮歌合」（12～15・24・4
6～47・60・92・101～103・116・118・131・153～
154・178・212・243～244・264・271・301・326～
328・340）／「亭子院歌合」（68・89・134）／「東宮雅院」
（81）／「春宮の帯刀の陣」（85）／「雲林院親王」（95）／「仁和中
将御息所家歌合」（108・114）／「侍」（161）／「是貞親王歌合」
（189・193～194・197・207・214～215・218・22
5・249～250・257～258・263・266・270・278・2
95～296・306）「雷の壺」（190）／「朱雀院の女郎花合」（23
0）／「寛平御時」（238・269・310）／「蔵人所」（238）／

「貞観御時」(255) / 「綾綺殿」(255) / 「同じ(=寛平)御時」
(272) / 「亭子院」(305) / 「僧正遍昭」(309)

こちらも見せて、皇族¹⁵⁾の名前、もしくは帝の御代、そして、宮中の場所の名称であることが見て取れる。

4. 上記現象に対する解釈

はじめに述べたように、古今和歌集の詞書に記されている情報は、原則としてその歌の古今集歌としての鑑賞に際して必要十分なものに整理されているものと目される。そして、一首の歌意の理解に必要なと思われぬ詞書の固有名詞は、皆、天皇に深く関わるものであった¹⁶⁾。

古今和歌集は天皇の命に応じて作られた勅撰集であり、詞書も、その敬語の使用状況等から、天皇に奏上する文体で記されていることが明らかになっている¹⁷⁾。ならば、古今和歌集の第一の鑑賞者である天皇に対して、その歌が天皇と親しく関係するものであるという情報は、歌意の理解には必要なくても、やはり、申し上げるべきことだったのであろう。そのように考えて、この現象は得心できる。

さて、以上のように考えられるならば、天皇に深く関わるということでもなく、歌枕とも考えられない固有名詞で、歌意の理解に必須とは思われぬ例が認められないことについてはどのように理解できるだろうか。

それを、今は、古今集四季部の性格に求めてみたいと思う。周知のように、この部には、四季の順行を描くことを目的として、四季折々の景物を詠んだ歌が、時間の推移に従って整然と配列されている。この部が、このように、時節のある

¹⁵⁾ 遍昭は桓武天皇の孫である。

¹⁶⁾ たとえば歌合の場合、天皇に直接関わらぬ歌合に出詠された歌から古今和歌集に撰ばれたものに「定文家歌合」の歌3首(巻2春下130/巻5秋下267/巻11恋一473)があるが、そのいずれもが、古今集の詞書には当該歌合からの詠とは記さない。

¹⁷⁾ 滝沢貞夫「勅撰和歌集の詞書について -古今和歌集の場合-」(和歌文学研究 52号) 1986

べき順行の姿を描き出すことを主眼としていたため、天皇が御覧になる際に必要だろう天皇あるいは皇族に深く関わる情報や、歌の鑑賞に必要不可欠と考えられる固有名詞以外を極力排除しようとしたという可能性を提案したい。そのように想定するならば、その巻名からも、自然ではなく、人事の歌が集められていると予想される、たとえば賀や哀傷などの部では、「藤原三善が六十賀によみける」（賀355）／「紀友則が身まかりにける時よめる」（哀傷838）など、天皇や皇族とはおよそ縁の遠い人名なども多く記されるのだが、これは、こうした巻々が、天皇にお仕えする人々の営みを示す、まさに人事を和歌で描くことを主眼としていることを示していると考えて、およそ納得がいくのではないか。

5. 今後の研究の展望

繰り返しになるが、人事を和歌で描く歌を集めることを主眼としていると思われる巻には、天皇にも深く関わらず、また歌枕でもなく、かつ、歌意の読解に必須とは思われない固有名詞がしばしば見られる。それを人事の歌の巻の一つの特徴と見るならば、たとえば、四季だけではなく、恋の部においても、そのような固有名詞の使用例がほとんど確認できない、そのことからすれば、こうした巻の性格は、自然詠を主題とした四季の部に近いものと捉えることができるのではないか。つまり、例えば「恋」の部は、人々がどのような恋をしているのか、ということを描こうとしているのではなくて、「恋」というものの、典型的な、季節の順行に匹敵する、整然とした姿を示そうとしたものであると考えられるのではないだろうか。

従来、古今和歌集の各巻々の性格については、巻名や、そこに収められたそれぞれの歌の主題などを手がかりに考えられてきた。そのため、恋部の場合であれば、人事を主眼とする巻と把握されてきたように思われる。しかし、今回のような、詞書の性質という視点から考えることで、古今和歌集全体の構成、あるいは構想について、何らか新しい見地が得られるのではないだろうか。

【参考文献】

- 拙稿(2015)「新撰和歌が詞書きを持たぬことについて」『大阪女子短期大学紀要』39,
大阪女子短期大学, pp. 112-116
- 窪田空穂(1935)『古今和歌集評釈』東京堂, p. 115
- 雨野弥生(2015)「『古今和歌集』二十七番歌詞書の地名をめぐって」
『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』15, 同志社女子大学, pp. 41-69
- 竹岡正夫(1976)『古今和歌集全評釈』(上)右文書院, p. 331
- 片桐洋一(1988)『古今和歌集全評釈』(上)講談社, p. 497 p. 546
- 滝沢貞夫(1986)「勅撰和歌集の詞書について - 古今和歌集の場合 -」『和歌文学研究』
52, 和歌文学会, pp. 1-12

논문 투고 일자 : 2018. 05. 15. 논문 심사 일자 : 2018. 07. 31. 게재 확정 일자 : 2018. 08. 03.
--

 <要旨>

 古今和歌集四季の部の詞書に見られる固有名詞について
 -古今和歌集の詞書の性格の一端-

水谷隆

古今和歌集の四季の歌の詞書には、多くの固有名詞がある。それら固有名詞のうちには、歌本文の意味を理解するために必須とは思われないものがある。そして、そのような固有名詞は、歌枕と、皇族の名および宮中の場所との2種に分けられる。歌枕について言えば、通常土地と異なり、歌人が実際にその場を見て詠むだけではなく、現場を見ずに、想像で歌を詠んだケースも多い。四季の歌の詞書に歌枕が記された例は、いずれも、それが実際に目にした風景なのか、それとも想像して詠んだものなのかを説明するものであった。このことから、古今和歌集の読者たちは、歌枕を詠んだ歌を、それが実景を詠んだものなのか、想像して詠んだものなのか区別しながら鑑賞していたということが推測される。一方、皇族の名と宮中の場所については次のように考えられる。古今和歌集の撰者たちは、天皇に奏上する形式で詞書を記した。ならば彼らは、古今和歌集の第一の鑑賞者である天皇に対して、その歌が天皇に関係するという情報を、歌意の理解には必要なくても、伝える必要があったのだろう。

A Study on the Proper Nouns in the Kotobagaki of the Poems of the Four Seasons in
Kokinwakashu.

A Fragment of the Characteristics of the Kotobagaki of *Kokinwakashu*

Mizutani, Takashi

The kotobagaki (prefatory prose statements) for the 31-syllable Japanese poems of the four seasons in *Kokinwakashu* contain a lot of proper nouns, some of which seem to be unrelated to comprehending the meaning of the poems themselves. These proper nouns can be divided into two groups: utamakura (place names with allegorical resonance) and the names of the royal family members or places in the court. With utamakura, there are a lot of cases where the poets compose poems not only by directly observing scenery but also by imagining the scenery without actually going there. Utamakura were used in the kotobagaki for the poems of the four seasons to indicate whether the poet actually viewed a scene or created it from imagination, and it is supposed that readers of *Kokinwakashu* gained a greater appreciation for the poems knowing whether they depicted actual or imaginary scenes. However, no such enhanced appreciation comes from including the names of royal family members and places in the court it is supposed surmise that the editors of *Kokinwakashu* wrote kotobagaki as a way of reporting to the Throne in order to inform the emperor, the first reader of *Kokinwakashu*, whether a poem concerned the emperor—even if such information was not necessary to understand the poem.